

開催館名指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ 海はすごい！ 琉球・南島との海物語

開催期間：平成28年1月23日（土）～平成28年3月6日（日）



【企画展の内容・目的】

- 当企画展では、海洋政策研究財団が『小学校における海洋教育の普及促進に関する提言』に示している海洋教育推進に立脚し、学校教育及び社会教育、さらに生涯学習の一環として、「海と人との共生」について、次世代も含めた幅広い年齢層に理解させていくことをねらいとした。
- 海とのふれあいや、海と人とのつながりを通して、「海と人との共生」について学び、考え、理解し、自発的・積極的に活動できる人づくりと地域づくりの礎とした。
- 関連事業として、フィールドワークや講座、ワークショップを実施。特に、フィールドワークの磯辺遊びでは、多様な生き物に直接触れることで、「海に親しむ」、「海を利用する」、「海を守る」ことを学習し、「海と人との共生」について学び、考え、理解し、自発的・積極的にできる心を育む機会とした。

1. 企画展示の内容

- 開催期間：平成28年1月23日（土）～平成28年3月6日（日）
- 開催場所：指宿市考古博物館 時遊館 COCCOはしむれ 2階特別展示室
- 入場者数：1,575人



指宿市考古博物館 外観



企画展会場 入口



①【海に親しむ】 ②【海を守る】

「第1章 指宿のまわりの海を知ろう！」

◎鹿児島大学水圏生物博物館と連携した結果、カラフルな色を留めた有色標本を展示することができ、海の生き物の多様性を分かりやすく学べ、【海に親しみ】を持たせることができた。

◎パークボランティアと連携したフィールドワーク①で採集した国内外の様々な漂着物を展示することができた。このことで、南から北へ流れる「黒潮」によって多くの国々とつながっている「南の海」について理解が深まるように展示できた。

◎この展示コーナー上のスポットライトに青色シートを被せることで、海の中にいるような雰囲気を作り出した。このことで、有色標本や漂着物が海の中にあるような視覚的な効果を高めることができた。



③【海を知る】

「第2章 海が運んだ品々」 「第3章 海が伝えた風習と伝統行事」

「第4章 琉球との海洋交流」

- ◎当助成事業により沖縄県内の博物館や美術館から指定文化財をはじめ、海を越えた「ひと」と「もの」との交流を示す資料を借り受けて展示することができた。そして、関連する鹿児島県内の資料と並列展示することで、幅広い時代の海を通じた沖縄・南島の人たちとの交流を学ぶことができ、【海を知る】きっかけづくりができた。
- ◎県内の伝統行事である「メンドン」や、琉球にまつわる郷土芸能などの民俗や石敢当を丁字に置く風習などに関する資料やパネル展示を行うことで、身近な生活の中に、海を越えた交流の証があることが理解でき、【海を知る】機会づくりとなった。



④【海を利用する】

「第5章 指宿の海運業者たち」

- ◎江戸時代の海運業の豪商である浜崎太平次の系図や手形箱など、貴重な史料を一同に展示した。このことで、琉球との交易に尽力した海運業者たちの知識を深められ、【海を利用する】ことで、遠い地域や国々と結びつくことができることに気づかせ、これからも海を利用していく重要性を理解する機会づくりができた。
- ◎これまで、ほとんど知られていなかった明治時代以降の海運業者たちについて、藩の後ろ盾を無くしながらも、沖縄で「寄留商人」として【海を利用する】ことで生きていった姿を紹介することができた。
- ◎これらによって、海の役割と海を利用する大切さを理解させることができた。



⑤【海と人との共生】

「第6章 海と人との共生」

- ◎第1章から第5章の展示を見学することで、「海に親しみ」、「海を知り」、「海を利用する」ことを学び、「海を守る」必要性を芽生えさせ、さらに、見学者が第6章の「海と人との共生」について学び、考え、理解し、自発的・積極的に活動ができる機会ができた。
- ◎一方的な展示ではなく、見学者自身と「海」を対峙させるようなパネルを展示させることで、海洋教育を推進していくことができた。
- ◎パネルや企画展図録にも「海洋教育」のキーワードや理念を提示し、海と共生するために、海について進んで調べたり、環境保全のために主体的にかかわったりするような自発的、積極的な活動の必要性を再認識させることができた。

【来館者の声】

- 「海」はすべての命の源、大切にきれいな海を守っていきたい。
- 海岸漂着物から海は世界とつながっていると改めて感じさせられた。海にはたくさんのゴミがあるのだろうと思うと悲しい。日本のゴミも外国へ行くのかな？
- 海で世界は結ばれており、地球はひとつであると実感した。
- 食文化や装飾に至るまで黒潮の重要性を感じた。
- いろいろな視点から海についての展示があって楽しかった。

2. 関連事業の内容

■フィールドワーク①

【開催日時】平成27年9月23日（水・祝）9：00～12：00

【開催場所】多良浜

【参加者数】14人

【実施内容・目的】

- 磯辺の生きた教材を用い、体感活動を行うことで、「海に親しみ」を持ち、海の生物の多様性を学び、海に関心を持つことができる。
- 国内外の漂着物の採集を行うことで、南から北への黒潮の流れを知り、多くの国々とつながる広い「海を知る」と同時に、「海を守る」気持ちを芽生えさせる。漂着物は企画展の展示品として活用した。



開催場所の全景の様子



パークボランティアの説明の様子



①【海に親しむ】

磯辺に生息する生き物を直接手でふれて観察する野外活動に参加することで、身近な海に多種多様な生き物がいることを遊びながら体感することができた。普段、屋内で遊ぶことの多い子ども達が、保護者と一緒に夢中になって生き物と触れ合う様子から、「海に親しむ」海洋教育の効果は大きいものと思われる。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



②【海を守る】

参加者が採集した磯辺の多種多様な生き物については、パークボランティアが図鑑などを用いてわかりやすく説明した。また、採集された貝の種類の減少状況やナマコの生態など、近年の海の汚染などの環境問題にもふれ、参加者が自発的・積極的に「海を守る」気持ちが萌芽できる機会となった。



③【海を知る】

海岸に打ち上げられた漂着物を採集し、漂着物に印字されている文字などからどこの国から流れてきたのかを確認した。パークボランティアが、漂着物と黒潮の流れについて地図を用いながら説明した。また、海岸の植物に南の島から流れ着いた種子が芽吹いていることも紹介することで、参加者に南の島々や遠い国々と海を越えてつながっていることを理解させ「海を知る」機会とできた。採集された国外からの漂着物は、企画展の「第1章 指宿のまわりの海を知ろう！」で展示品として活用した。

【来館者の声】

- 身近な海にたくさんの生き物がいることにびっくりした。親子で参加して楽しかった。これからも海で遊びたいと思った。
- いろいろな外国の品物が黒潮と季節風によって運ばれていることに驚いた。
- 清掃作業に参加して、海をきれいにして、生き物が過ごしやすい環境を守っていきたい。

■フィールドワーク②

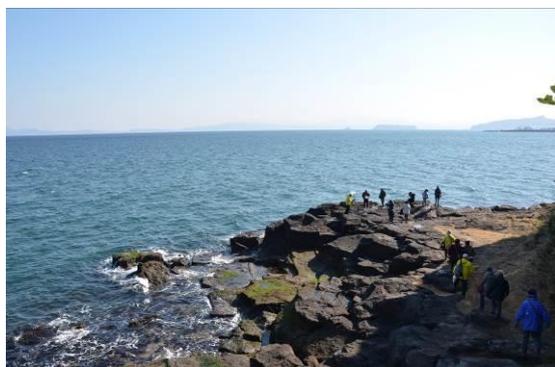
【開催日時】平成27年2月7日(日) 10:00 ~ 12:00

【開催場所】宮ヶ浜港・今和泉港周辺

【参加者数】23人

【実施内容・目的】

- 企画展で紹介した宮ヶ浜港と今和泉港の海岸を巡り、古来より南の島々との交流の拠点となった海岸地形の特徴や整備された港を直接見て、「海を知る」効果を高めた。
- 海を活用して運ばれた文物や食物、精神文化、風習などをまち歩きをしながら見ていくことで、「海を利用する」、「海と人との共生」について考える機会とした。



開催場所の全景の様子



日程説明の様子



①【海を利用する】

宮ヶ浜港は江戸時代から指宿の重要な港であり、豪商濱崎太平次も琉球との海運業を営むため拠点港として利用した。その山手には国登録有形文化財に登録されている商家群等が並んでいる。これらの文化財等を見学することで、先人達が「海を利用」して、琉球や南島との交流を行っていた歴史を知る機会とした。



②【海を知る】・【海と人との共生】

今和泉地区の海岸は、今から 10 万年前の阿多カルデラから噴出した火砕流が固結した溶結凝灰岩の海岸地形が続く。目の前の海がはるかかなたの南の島々へと続くことを説明し、「海を知る」効果を高めた。

参加者の眼下に広がる海を実見することで、これからの未来に向けてどのようにして「海と人との共生」を進めていかなければならないかを参加者自ら考えていく機会とした。



指宿まるごと観光ガイドや指宿ジオパーク研究会と連携することで、フィールドワークの効果を高められるようにした。参加者への説明を担ってもらうことで、ガイド会員の育成も兼ねた。

参加者が、博物館の学芸員による説明とは別に、自らガイド会に加入し、自己研鑽した市民による解説を聞くことで、生涯学習・社会教育の一環としても位置付けた。

このことで、海洋教育のキーワードの【海に親しむ】・【海を守る】ねらいの効果を上げることができた。

【来館者の声】

○身近な海や港を利用して、さまざまな地域と交流があったことが分かった。

○海を通して伝わった郷土芸能や風習が今も伝承されていることを初めて知った。海の偉大さが分かった。

○海があることが当たり前だったが、説明を聞きながら海や港、文化財を見ていくと大切が分かった。これからどのように海と関わるか考えてみたい。

■夜光貝でネックレスを作ろう

【開催日時】平成27年7月11日(土)～8月31日(月)

【開催場所】指宿市考古博物館 2階時遊空間

【参加者数】100人

【実施内容・目的】

- 企画展の開催前に関連事業として、沖縄や南島の海でしか採集できない夜光貝を材料としたネックレス作りの体験学習を開催した。身近な海では採集できない夜光貝が、海を越えた南島産であり、先史時代に夜光貝が交流品として様々な地域に運ばれ、高度な製作技術で貝製品が作られていたことを体験者に理解させ、「海を知る」、「海を活用する」、「海を守る」ねらいの効果を高めることを目的とした。



開催場所の全景の様子



体験学習の様子



①【海を知る】

体験者には体験前に、夜光貝の生息地域と貝殻の表面下に虹色に輝く真珠層があり、古代から夜光貝が貝製品の材料のひとつとして重宝されていたことを説明する。このことで、夜光貝についての知識を深めることができ、「海を知る」ねらいの効果を高めた。



②【海を利用する】

ネックレス作りを行うことで夜光貝の魅力を知り、海産物と海に呈して関心を高め、先史時代から「海を利用」して遠方まで運ばれていたことを理解させる。

貝の表面が非常に硬いことを体感させることで、先史時代の貝製品の製作技術の高さを理解させ、「海を利用する」ことで技術の伝播が行われたことを理解する機会とした。

企画展では、「海を利用」して運ばれた夜光貝を展示した。



③【海を守る】

体験者に、夜光貝の採集量の減少を説明することで、海の現状を理解させ「海を守る」気持ちを芽生えさせることができた。

特に、世界にひとつしかない虹色に輝く手作りの夜光貝のネックレスの完成時においては、夜光貝の希少性を知ること、「海を守る」ねらいの効果が高まった。

【来館者の声】

○夜光貝が、沖縄や南島の海でしか取れないことを初めて知った。夜光貝が生息する環境を守らないといけないと思った。

○昔の人も夜光貝の魅力を知って、遠い南の島から運んでいたことに驚いた。

○夜光貝が展示される企画展が開催されるのが楽しみだ。

■海の講座

【開催日時】平成27年11月6日(金) 9:30 ~ 11:00
平成28年 2月7日(日) 10:00 ~ 12:00

【開催場所】指宿市考古博物館歴史劇場

【参加者数】118人

【実施内容・目的】

- 企画展の内容について研究をしている専門家を招聘し、幅広い視点での最新情報を交えながら、分かりやすい講演を実施した。このことで、「海を知る」ための「海」について知識を深めることができる。
- 最新の研究成果や海へのかかわり方について理解を深めることで、参加者が自発的・積極的に「海と人の共生」について活動する機会となった。



開催場所の全景の様子



講演の様子



【海を利用する】

海の講座①として、鹿児島大学法文学部の渡辺芳郎教授を招聘し、琉球・南島との交流について分かりやすく講演して頂いた。先史時代から海を越えて海洋交流があり、様々な文物交流によって文化が築かれてきたことを紹介頂いた。参加者は、海の講座を聴講することで、「海を利用した」歴史・文化が南九州で形成されていたことを理解することができた。



【海を利用する】・【海と人との共生】

海の講座②として、西郷南洲記念館の徳永喜館長を招聘して、江戸時代に海運業で財を成した指宿出身の濱崎太平次の偉業について、分かりやすく講演して頂いた。

「海を利用して」琉球や南島から黒砂糖や中国からの輸入品等を薩摩藩へ運んだことや、江戸時代の海運史を学ぶことで、これからの未来に「海と人との共生」をどのようにしていくべきかを考える機会となった。参加者は、海とかかわり方について自発的に考える機会となり、「海と人との共生」について活動のきっかけとなった。

【来館者の声】

○先史時代から、土器や石器が遠い海を越えて、沖縄や南の島々へ運ばれていることが分かった。

○海を利用した交流が、数千年前からあり、現在も続いていることに驚いた。

○これから、海を利用しながら、共生していくかを真剣に考える時期だと思った。

【事業全体のまとめ】

- 本サポート事業を活用することで、平成8年度の博物館開館以来、初めて沖縄県内の博物館・美術館等の7施設と連携することができた。沖縄県への資料調査費がサポート対象となったおかげで、直接各施設を訪問し、学芸員との共同調査を実施することができ、これまで分からなかった新しい資料等の掘り起こしをすることができた。
- 沖縄県内の各施設の学芸員と調査等を行うことで、普段借用することができない浦添市指定文化財の琉球漆器等の貴重な資料を拝借することができた。沖縄県内からの借用資料運送費がサポート対象となったおかげで、博物館開館以来、初めて沖縄県内の収蔵資料を一同に展示することができた。
- フィールドワークの砂浜・磯部遊びを実施し、参加者が採集した漂着物を企画展の展示品として活用することができた。このことで、参加者が展示されている採集品を見ることで、「海に親しむ」、「海を守る」ねらいの効果を高めることができた。
- 指宿市内各地に、利永琉球傘踊りや大山琉球傘踊り、中小路唐人踊り、宮ノ前唐人踊りなど、琉球にゆかりのある郷土芸能が継承されている。この郷土芸能の衣装や道具、唄と琉球舞踊とのかかわりについて、調査研究することができた。また、その成果を企画展の中で紹介することができ、「海を知る」ねらいの効果を高めることができた。
- 指宿出身の江戸時代の海運で財をなした濱崎太平次や河野覚兵衛は、明治時代以降薩摩藩の後ろ支えがなくなったため、衰退をしていく。沖縄での資料調査で「寄留商人」となって生きていった濱崎家の姿を垣間見ることができた。濱崎家や河野家の残存する資料を展示することで、「海を利用する」ねらいの効果をたかめることができた。
- 企画展の最後の章では、「海と人との共生」でコーナーを設定することができた。サポート事業で制作した展示パネルを一方的な展示文でなく、双方向的な展示になるような展示文のパネルを作成することで、積極的・自発的に「海と人との共生」について学ぶ機会となった、
- アンケートの「海に学ぶ」についての結果は、「①良く学べた」が23名、「②学べた」が30名、「③普通」が7名であった。このことから、企画展への見学者は「海」について効果的に学べたと考えられる。
- アンケートの「海についての関心」についての結果は、①『「海」に親しみを持った』が19名、②『「海」のことをもっと知りたくなった』が16名、③『「海」を守りたくなった』が18名、④『「海」の大切がわかった』が28名、⑤特にはないは0名だった。このことから、本サポート事業を活用した企画展では、当初の目標であった「海洋教育」の推進が図られたと考えられる。

3. 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 沖縄県立博物館・美術館	沖縄県と鹿児島県の先史時代における「もの」と「ひと」との交流について、黒曜石製品や縄文土器について情報共有をし、基礎的研究を行った。
2. 沖縄県立埋蔵文化財センター	琉球王国時代に、首里城内の建物や石像の材料である石材（凝結凝灰岩）が薩摩藩の藩港である指宿市内の山川港から船で運ばれていることについて、石材認定や石材加工技術について連携して研究を行った。
3. 那覇市立歴史博物館	江戸時代に薩摩藩が支配していた琉球王国について薩摩藩に関する文献資料の有無や王族尚氏の古文書に書かれていないか学芸員と連携して調査を行った。
4. 那覇市立壺屋焼物博物館	江戸時代、琉球王国の焼物奉行で管理された「壺屋焼き」が薩摩藩や他藩に運ばれているかについて、学芸員の指導のもと情報収集を行った。
5. 浦添市美術館	美術館に配属されている琉球漆器の専門の学芸員と共に、江戸時代における琉球漆器の特徴と、薩摩藩、指宿市内に運ばれた琉球漆器について情報共有を行った。
6. 琉球大学	指宿市内に伝承されている琉球にまつわる郷土芸能の衣装、振り付け、道具、曲、楽器について調査を行った。
7. 沖縄国立劇場	琉球にまつわる郷土芸能の「利永琉球傘踊り」、「大山琉球傘踊り」、「物袋唐人踊り」、「中小路唐人踊り」、「宮ノ前唐人踊り」の衣装、振り付け、道具、曲、楽器について調査を行った。
8. 鹿児島県立博物館	指宿市のまわりの海や海洋生物、海岸地形について、専門員と連携して調査を行った。特に、「黒潮」と南島からの漂着物についての最新研究成果を得ることができた。
9. 鹿児島県歴史資料センター 黎明館	江戸時代の海運業者である浜崎太平次の関連資料について、専門研究員と連携して資料調査を行った。
10. 鹿児島大学水産学部	身近な海岸や磯部の生き物や黒潮で運ばれた魚について基礎的資料調査を行った。
11. 指宿まるごと観光ガイド	指宿まるごと観光ガイドと連携することで、当企画展の付帯事業のフィールドワークの効果を高められるようにした。
12. 指宿ジオパーク研究会	当企画展の付帯事業のフィールドワークの効果を高められるようにした。
13. パークボランティア	環境省が管理している国定公園内で保全・教育を担うパークボランティアと連携するし、当企画展の付帯事業のフィールドワークの効果を高められるようにした。
14. 琴鳴堂	博物館展示資料やミュージアムグッズを制作する琴鳴堂と連携することで、当企画展の付帯事業のワークショップ（南島産の夜光貝で装飾品を作ろう）の効果を高められるようにした。

4. 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. 指宿市広報誌	大昆虫展&シェルコレ 2015 ①夜光貝でネックレスを作ろう 平成27年7月号
2. 指宿市広報誌	市制10周年記念 時遊館COCCOはしむれ 指宿まるごと博物館Ⅶ 海はすごい! 琉球・南島との海物語 平成27年12月
3. 指宿市広報誌	いぶすきまるごと博物館 vol116 琉球との交流を今に伝える「琉球漆器」 平成28年1月
4. 指宿市広報誌	学びのふるさと講座 平成28年1月
5. 指宿市広報誌	日曜講座 平成28年2月
6. 南日本新聞	「黒潮流域の交流たどる」「琉球漆器や海運業紹介」 平成28年2月1日(月)
7. 朝日新聞	「この一品」 『保温用の豪華琉球漆器』 平成28年1月28日(木)
8. 朝日新聞	「この一品」 『泡盛運んだ「鬼の腕」』 平成28年2月4日(木)
9. 朝日新聞	「この一品」 『九州南部から沖縄へ』 平成28年2月11日(木)
10. 朝日新聞	「琉球・南島との交流を紹介」 平成28年2月27日(土)
11. MBCテレビ	時遊館COCCOはしむれ企画展のご案内 平成28年1月22日(金)
12. MBCラジオ	時遊館COCCOはしむれ企画展のご案内 たんぽぽクラブ 平成28年1月

以上